



北見の歴史

あれこれ

No.65

田丸 誠

学校給食の始まり

新学期です。筆者が一年生になって、一番の楽しみは給食でした。そこで、今回は学校給食の始まりを話題にしましょう。

戦前の学校では災害や大恐慌の時に臨時で給食がありました。通常、子供達は家から弁当を持って登校しました。弁当を見れば各家の貧富の程度が分かり、極貧で弁当を持参できない子供(欠食児童)達は、教室の外で昼食の時間を過ごしました。

昭和二十年(一九四五)敗戦になって、朝鮮半島・台湾・満州など植民地からの食糧移入も絶え、国内は大凶作で配給が維持出来ず、毎日全国で多くの餓死者が出る状態で、最も悲惨だったのは野坂昭如著『火垂るの墓』の兄妹のような、保護者のいない被災孤児達でした。都会の学校では教職員が食糧買い出しに走り、生徒達も食う物が無いので欠席者が多かったです。

翌二十一年五月、米国から食糧特使フーバー元大統領が来日、マッカーサー元帥と会談、「食糧の緊急輸入と学校給食の導入」を進言、五月六日「食糧輸入こそ日本再建の前提」との声明を発表しました。同年五月十九日には二五万人が参加して食糧メーデー(飯米獲得人民大会)が開催されて政治危機となり、政府は食糧確保のために農家からの食糧供出に強権を発動し、占領軍は小麦粉を大量放出、食糧の大量輸入で危機を脱しました。

藤原辰史著『給食の歴史』によれば、フーバーの進言を受け、昭和二十一年十月十一日、占領軍の公衆衛生福祉局の幹部等九人は「占領軍の統治を安定させるために、日本の子どもたちへの給食計画を断行すべし」と会議で合意したそうです。以後、日本の関係機関と協議を重ね、平行して旧日本軍から押収した缶詰類の利用を検討し、米国で日系人・浅野七之助が中心となって設立した「日本難民救済会」を母体とするアジア救済連盟(通称ララ)からの物資提供を確保しました。同年十二月十一日、日本



政府は全国の児童に学校給食を実施する方針を決定し、各地方長官へ次官通達「学校給食実施の普及奨励について」を発し、同月二十三日には都内の永田町国民学校でララ物資を使った給食が開始され、大都市を中心に順次拡大実施されていきました。(上の写真は「モノと子どもの昭和史」から転載したものです。)

当地では昭和二十二年二月一日に北見市学校給食委員会を設置、占領軍からの放出で市内十校に割当てられた魚類缶詰一・五五一トンを活用して、三月初旬に学校給食を実施

することを決めましたが、二月十八日に第一回目の缶詰類が到着したので、早速二月二十日から「おかず」の給食を開始しました。当時の新聞は「このサケの缶詰おいしいネ」と子供達が喜んだ様子を伝えていきます。その後、各校で鍋などを揃えて調理室も整え、母親達の協力で脱脂粉乳を中心としたララ物資による温食の給食も始まり、パン給食の開始は二十六年からでした。

端野では、昭和二十三年七月に端野小学校で児童雨具室を改造して給食調理室を設け、週五日制の味噌汁の給食を開始しました。留辺蘆の学校給食は、三十二年二月にミルクが支給されたのが始まりだそうです。常呂については、町史に四十二年十二月学校給食センターが完成し、四十三年一月から完全給食が実施されたとあります。なお、常呂図書館に戦後関係資料を探してもらいましたが、ララ物資の受け入れなどは不明でした。